

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：14602

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00279

研究課題名(和文) 中世私撰集所収万葉集の総合的研究 失われた非仙覚本の享受・変遷の解明

研究課題名(英文) Manyousyu of middle ages private anthology of waka poems-elucidation vicissitudes of lost not Sengaku revised text.

研究代表者

樋口 百合子 (Higuchi, Yuriko)

奈良女子大学・大和・紀伊半島学研究所・協力研究員

研究者番号：90625493

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：中世最大の名所歌集『歌枕名寄』の未調査の写本四本を調査し、その系統を明らかにし、その書写の過程で、それぞれの時代の文学的成果を取り入れながら、増補と略抄を繰り返し、常に変動していく歌集としての特性を解明した。さらに中世最大の類題集『夫木和歌抄』所収萬葉歌の長歌と短歌について調査、『歌枕名寄』よりも数十年後に編纂されたが、所収萬葉歌は『歌枕名寄』と同様非仙覚本系であることを解明した。

仙覚の業績が都で受け入れられるに従い、次第に失われていった非仙覚本が中世成立の名所歌集をはじめとする中世の類題歌集に残る可能性について論じ、中世類題歌集の『萬葉集』訓点史における役割を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

十四世紀半ばに仙覚校訂本が普及し始め、それと共に、非仙覚本系写本が急速に失われた。現存するそれらを合わせても、かつての非仙覚本系写本のすべてを網羅することが不可能である。中世に編纂された『歌枕名寄』をはじめとする大部な私撰集に所収された『萬葉集』は、現存する仙覚校訂本と異なり(多くの新点歌・改訓歌を所収するが、それらは仙覚校訂本と異なるものが多い)、またどの非仙覚本とも異なり、烟滅した非仙覚本に依拠したと考えられる。それらに残る仙覚訓と異なる新点訓や改訓を持つ『萬葉集』は、訓点史に新たな地平を拓き、行き詰りにある訓・解釈を解決に導く可能性を持つ。

研究成果の概要(英文)：This paper situates ten not yet-investigated manuscripts of “Utamakura Nayose”, the biggest anthology of waka poems of the medieval period firstly in a detailed examination by clarifying their backgrounds. In their process of manuscripts copying, literature values of each period had been added to manuscripts, thus increase and decrease of poems compiled in them repeatedly occurred. This paper indicates this ever-changing nature as the features of the anthology. Furthermore comparison between Man'yo Choka and “Utamakura Nayose” of waka poems and cross examination of manuscript copies and old copy of Man'yō-shū reveals that the number of waka poems compiled in “Utamakura Nayose” highly exceeds that of previously contemplated. I also investigated the Man'yō poems in the “Huboku Wakasyō” and found that, like the “Utamakura Nayose” they were non-Sengaku lineages and did not match any existing non-Sengaku manuscript.

研究分野：和歌文学

キーワード：類題歌集 名所歌集 歌枕名寄 夫木和歌抄 仙覚校訂本 非仙覚本 長歌 新点

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 平安時代から、『古今和歌六帖』をはじめとする、作歌の参考とすべき類題歌集が編纂された。中でも地名は、名所或いは歌枕と称され「特定の概念を伴う地名、固有の情緒が付着する地名」として、「詩的言語特有の機能」を持つ歌語の中でも、その占める地位は平安中期以降高まっていった。それに付随して地名の知識を得ることのできる書物が必要とされるようになる。早くに貫之歌枕・四条大納言歌枕が編纂されたと言われるが、いずれも現存しないため体裁は不明である。その後、『能因歌枕』『奥義抄』『和歌初学抄』など、一部に地名を類聚する(証歌を伴わない)歌書が次々編纂される。やがて地名のみではなく証歌を必要とされるようになる。証歌を伴う現存する最古の名所歌集は藤原範兼撰の『五代集歌枕』(平安後期)である。以後名所歌集は江戸時代に至るまで数多く編纂され、井上宗雄氏の調査によると江戸初期に至るまで七十書近く編纂されたという。その中で中世最大の名所歌集として、その後の類書に多大な影響を与えたのは『歌枕名寄』(全三十八巻 総歌集7500首 地名数凡そ2800、いずれも流布本最善本の宮内庁本)である。ところが、『歌枕名寄』は、名所歌集としての特性(勅撰集のように、親本を忠実に書写するのではなく、増補、抄出が頻繁に繰り返される)のため、現存する写本の系統は錯綜している。

(2) 『歌枕名寄』の特徴の一つとして、萬葉歌が多く所収されることがある。原撰本に最も近いと推定する、細川幽斎が三條西家に伝来する『歌枕名寄』を書写した細川本(永青文庫蔵)は、『萬葉集』の歌数1177首(述べ数)、中でも漢字本文表記の長歌が、中世成立の私撰集中、最も多く、これは『歌枕名寄』が『萬葉集』から直接採取したことを推定させるものである。『歌枕名寄』より20年余り後に編纂され、所収歌数が遥かに多い『夫木和歌抄』に漢字本文表記が一首もないことに比べれば、『歌枕名寄』の数は特筆に値する。『歌枕名寄』の成立年代(鎌倉後期)を考えれば、『萬葉集』研究史上最も優れた校訂を行った仙覚の校訂本を参照したかしかかったかを調査・考察することは重要である。

(3) ところが、『歌枕名寄』所収萬葉歌の『萬葉集』訓点史上における重要性はあまり注目されることがなかった。『歌枕名寄』以外にも『夫木和歌抄』『名所歌枕』『十四代集歌枕』など、大量の萬葉歌を所収する中世成立の私撰集所収萬葉歌の調査と考察は殆ど手付かずの状態であった。

## 2. 研究の目的

上記の背景から、本研究は『歌枕名寄』の写本のうち未だ調査が進んでいない写本を翻刻調査し、その系統と所収萬葉歌を検討する。次に『歌枕名寄』よりも多くの萬葉歌を所収する『夫木和歌抄』、他に『名所歌枕』『十四代集歌枕』所収の萬葉歌を討究する。

以上の調査により『歌枕名寄』を通して、名所歌集の継承と変遷を明らかにする。さらに所収萬葉歌、特にその長歌の考察により、中世成立の私撰集所収萬葉歌が仙覚校訂本の影響を受けているか否かを考察し、『萬葉集』訓点史・享受史上での位置を解明することを目的とする。

## 3. 研究の方法

(1) 『歌枕名寄』のテキストについては、松浦武四郎記念館蔵本は写真を入手、翻刻の上現地調査・考察を行う。明治大学図書館蔵毛利家旧蔵本も写真を入手の上、現地調査を行い、翻刻と調査、論文作成を行う。また先に翻刻を済ませたが、調査が十分でなく論文作成を行っていない三室戸寺蔵本、内藤記念くすり博物館大同薬室文庫蔵本、国立歴史民俗博物館蔵田中穰氏旧蔵本の調査と論文作成を行う。この三本はいずれも既に原本調査を行っている

(2) 『歌枕名寄』所収萬葉歌については、最も原撰本に近いと目される細川本を中心に漢字本文表記(これまでも部分的に調査を行っている)・仮名表記萬葉歌の調査を行う。『歌枕名寄』を超える萬葉歌を所収する『夫木和歌抄』については、長歌と短歌(人麻呂関係のみ)の調査を行う。『新編国歌大観』本は校訂本であるので、永青文庫本(影印本)、宮内庁書陵部蔵本(翻刻本)、静嘉堂本(現地調査)の三写本を比較しながら調査する。

(3) 細川本『歌枕名寄』所収の漢字本文表記の『萬葉集』長歌を、重出歌を含めすべて抄出、旧『国歌大観』番号順に編集し、一覧する。

## 4. 研究成果

(1)『夫木和歌抄』所収の『萬葉集』長歌について調査・考察を行った。静嘉堂本を底本とし、宮内庁書陵部本、永青文庫本を参照し、併せて寛文五年刊本との比較を行った。その結果、写本と刊本との間には乖離があり、恐らく刊本は寛永版本により、修正されたであろうこと、従って『夫木和歌抄』の成立時(1310年ごろ)の姿に近いのは写本であることが判明した。そこで写本三本を比較しつつ所収萬葉歌の考察を行い、長歌の付訓の状況から、非仙覚本系の平仮名訓本、片仮名訓本のいずれとも異なる古写本に拠ること、仙覚文永本系の一本を資料としたのでもなく、渋谷氏のいう「古・次点訓と文永本の両者に拠る」のでもなく、仙覚校訂本(仙覚以前か以後かは不明であるが)と異なる、多くの新点歌に独自の訓を持つ古写本に依拠したのであること、改訓も同様で、仙覚校訂本とは異同も多く、次点歌・新点歌ともに現存本と異なる独自の訓が多く、特異な本文を類推できる訓もあることなどが判明した。続いて短歌について調査・考察を行ったが、短歌の数は千首を超えるので、人麻呂歌(作者名を人麻呂、人麿、人丸とする歌)を対象とした。その結果長歌と同様仙覚校訂本の影響を受けず、現存しない非仙覚本の本であるという結論を得た。『夫木和歌抄』よりも二十年以上前に成立した『歌枕名寄』と同様、『夫木和歌抄』も仙覚校訂本の影響を受けていないのである。仙覚の影響は何時頃から流布するのであるか。現在の研究状況では14世紀半ばとされるが、その当否を次に調査したいと考えている。なお「『夫木和歌抄』所収萬葉集長歌について 長歌訓の特質と価値」「『夫木和歌抄』所収萬葉歌について 人丸関係の短歌を中心に」として纏めた。

(2)『内藤くすり博物館大同薬室文庫蔵『歌枕名寄』は、歌数と内徴により流布本系統と判明したが、宮内庁本を始めとする甲類、澤瀉本を始めとする乙類のいずれとも異なっていた。零本ではあるが、佐野本よりも古態を残しており、萬葉歌については仙覚の影響を受けない非仙覚本系であった。なおこれは「内藤記念くすり博物館大同薬室文庫蔵『歌枕名寄』」として纏めた。

(3)仙覚校訂本の一つである宮内庁書陵部蔵『萬葉 仙覚註釈附』(以下『萬葉と略称』)の調査・考察を行った。『萬葉』は、萬葉歌一千首を漢字本文片仮名傍訓付で引用する。仙覚寛元本の特徴である二重訓を多く持つこと、仙覚文永本系の中でも極めて限定されたグループの特徴である巻七の錯簡を持つこと、二つの特徴を備えた特異な一写本である。これらと中世の私撰集所収萬葉歌の関わりを考察していくことが今後の課題と考えている。なおこれは第六十五回和歌文学会大会において「宮内庁書陵部蔵『萬葉』について 仙覚寛元本と文永本の間」として発表した。

(4)『歌枕名寄』の一写本である国立歴史民俗博物館蔵田中穰氏旧蔵『歌枕名寄』(以下『田中本』と略称)の調査・考察を行い、細川幽斎筆とされる細川本よりも百年ほど前に書写された一本であること(書写年代が明記されている)、非流布本系と目されること、一巻から三十六巻までの抄出本であること(但し未勘国上下二巻を欠落したものではなく、国名を決定し、それぞれの国に配置することによって未勘国部を消滅させたものと推察する)、『夫木和歌抄』による大量の増補があることが判明した。これは「国立歴史民俗博物館蔵田中穰氏旧蔵『歌枕名寄』について」として論を纏めた。

(5)先に『夫木和歌抄』について調査を行ったが、田中本と『夫木和歌抄』との関係を調査するために、陽明文庫蔵の『夫木和歌抄』及び『夫木和歌抄』抄出本二本の調査を行った。その結果田中本が依拠した『夫木和歌抄』がこれらの抄出本でないことが判明した。また陽明文庫では先に調査した宮内庁書陵部蔵『萬葉』と関わりが深いと推定される、寂印成俊本系の本、近衛本の調査を行っている(コロナ禍のため中断)。『歌枕名寄』所収万葉歌は非仙覚本系であることは既に述べてきたが、その論をより明確にするために、『歌枕名寄』所収の新点歌(『歌枕名寄』全巻にわたる)と仙覚訓との比較や、現存する写本の限られている巻十六について、『歌枕名寄』所収歌の調査を行い、尼崎本、廣瀬本、類聚古集、古葉略類聚鈔、西本願寺本との比較を行い、非仙覚本系ではあるが、現存する非仙覚本とは異なる性格を持つものであるという結論を得た。

(6)明治大学附属図書館蔵毛利家旧蔵本『歌枕名寄』を翻刻し、調査を行った。その結果非流布本であること、仙覚校訂本を受容していないこと、『歌枕名寄』他写本に見られない鴨長明との関わりが存在し、長明が鎌倉紀行記を記した可能性あることなどが判明した。これは「明治大学図書館蔵毛利家旧蔵本『歌枕名寄』について」として纏めた。

(7)『歌枕名寄』に多くみられる左注を抜き出し、現在定説をみない本文に新しい視点を加味できる可能性のある本文の存在や、『歌枕名寄』における『萬葉集』の編集意識、再編意識などについて討究した。さらに『歌枕名寄』細川本(諸写本中最も原撰本に近い)中の長歌をすべて抜き出し(107例)、一覧し発表、中世萬葉集を研究していくために学会共有のものとした。これまでの『歌枕名寄』所収『萬葉集』長歌についての論考をまとめ、『歌枕名寄』所収『萬葉集』長歌に仙覚本、非仙覚本のどの写本とも一致しない仙覚の新点を多数見られること、改訓を採り入れていないことを明らかにした。失われた非仙覚本群が中世私撰集中に埋もれており、それらを明らかにすることにより、空白の『萬葉集』訓点史を埋めることができる可能性について論じた。『歌枕名寄』所収『萬葉集』長歌について」として纏めた。

(8) 『歌枕名寄』は、完本は七本で残りは欠本、残欠本である。それらの写本はまた内容から全体を小規模に纏めた抄出本と書写者の必要とする巻のみを写した切出本に別れ、抄出本にはまた大量の増補があるという、抄出と増補が一つの写本に見られる特質を見ることができた。これは中世『源氏物語』に見られる、量的拡大と量的縮小が行われているという文学史の流れと軌を一にするということであろう。『歌枕名寄』も『夫木和歌抄』も所収萬葉歌は非仙覚本系であり、現存する非仙覚本系と異なる訓を多く持ち、また新点歌において仙覚校訂本と異なる訓を有し、散佚非仙覚本に依拠したという結論を得た。『萬葉集』訓点史の空白を埋めるべく、多くの萬葉歌を所収する私撰集中に残るであろう散佚非仙覚本の調査が必要であるという、今後の課題も見えてきたのである。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 8件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 樋口百合子	4. 巻 1
2. 論文標題 『歌枕名寄』所収『萬葉集』長歌について	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 万葉写本研究	6. 最初と最後の頁 11 - 24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 樋口百合子	4. 巻 1
2. 論文標題 『歌枕名寄』細川本所収新点長歌・短歌一覧	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 万葉写本研究	6. 最初と最後の頁 25 - 27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 樋口百合子	4. 巻 1
2. 論文標題 細川本『歌枕名寄』所収万葉集長歌一覧	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 万葉写本研究	6. 最初と最後の頁 28 - 46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 樋口百合子	4. 巻 82
2. 論文標題 明治大学図書館蔵毛利家旧蔵本『歌枕名寄』について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 汲古	6. 最初と最後の頁 5 - 10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 樋口百合子	4. 巻 79号
2. 論文標題 国立歴史民俗博物館蔵田中穰氏旧蔵『歌枕名寄』について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 汲古	6. 最初と最後の頁 7 - 12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 樋口百合子	4. 巻 76号
2. 論文標題 内藤くすり博物館大同薬室文庫蔵『歌枕名寄』 流布本系丙類について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 汲古	6. 最初と最後の頁 12 - 17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 樋口百合子	4. 巻 17
2. 論文標題 『夫木和歌抄』所収萬葉歌について—人麻呂関係の短歌を中心に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 万葉古代学研究年報	6. 最初と最後の頁 155 - 174
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 樋口百合子	4. 巻 121
2. 論文標題 『夫木和歌抄』所収萬葉歌について 長歌訓の特質と価値	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 上代文学	6. 最初と最後の頁 29 - 43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 樋口百合子
2. 発表標題 国立歴史民俗博物館蔵田中穰氏旧蔵『歌枕名寄』について 所収万葉歌を中心に
3. 学会等名 万葉写本研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 樋口百合子
2. 発表標題 宮内庁書陵部蔵『萬葉－仙覚注釋附－』の検討
3. 学会等名 万葉写本研究会（代表田中大士）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 樋口百合子
2. 発表標題 『歌枕名寄』の依拠した萬葉集
3. 学会等名 萬葉語学文学研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 樋口百合子
2. 発表標題 宮内庁書陵部蔵『萬葉－仙覚注釋附－』について－巻七錯簡－
3. 学会等名 和歌文学会大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------